

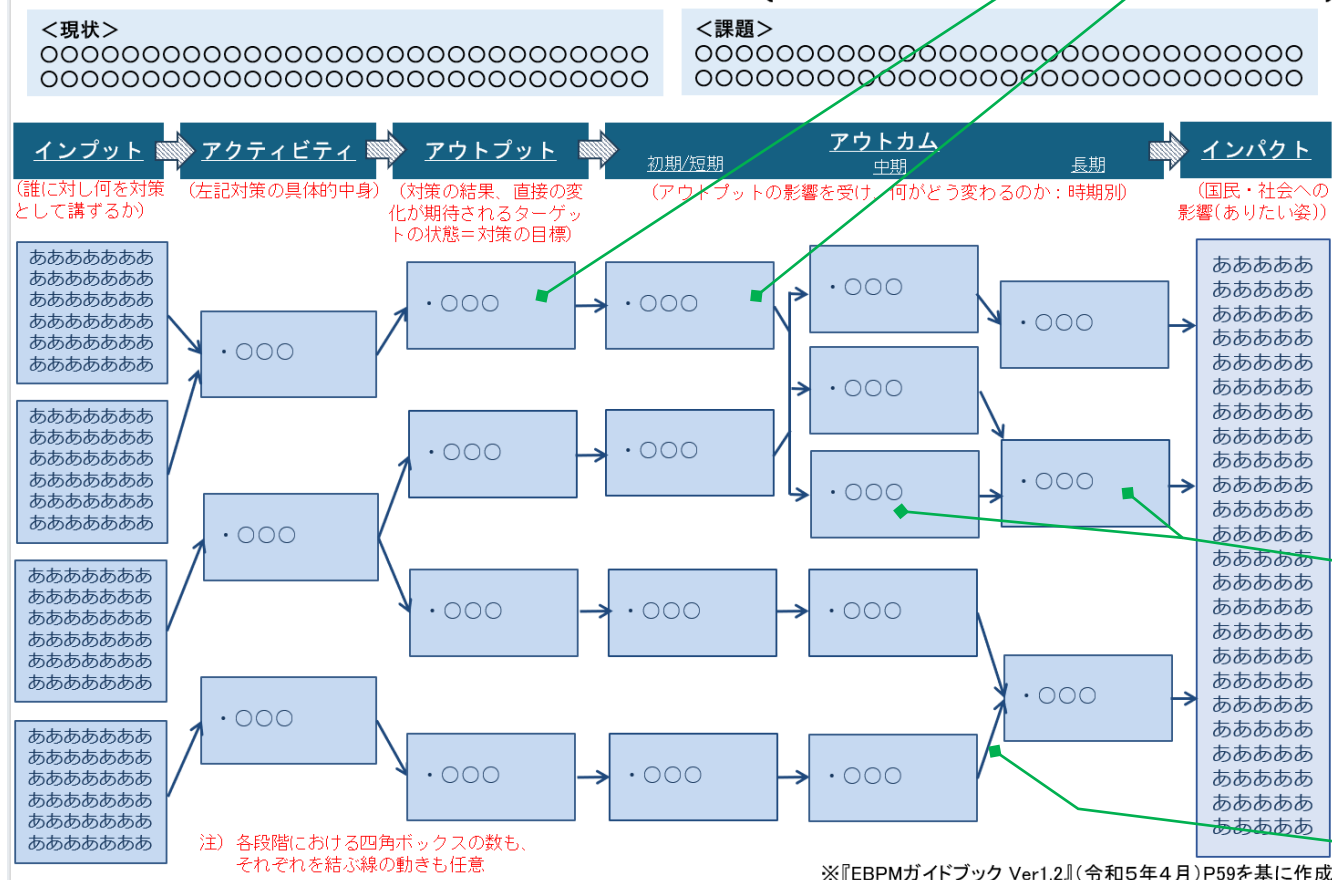
汎用ロジックモデル使用上のポイントと留意点①

○ロジックモデルとは(意義)

- ・講じた対策の進捗状況を適時・適切に把握し、更に効果をあげるための改善を行うには、解決したい課題と効果発現の経路を明確化し、かつ、効果を測るための適切な指標を設定することが重要
- ・これらを一覧性をもって整理し、関係者間で容易に共有・確認できるツールとして「ロジックモデル」が有用

汎用ロジックモデル (ppt版20251008)

→: 論理的な因果の流れ (矢印1つ1つに意味を持たせることが大切)



※『EBPMガイドブック Ver1.2』(令和5年4月)P59を基に作成

対策がうまく回っているかを確認するため、「アウトプット」や「アウトカム（初期/短期）」の欄に、いわゆる「炭鉱のカナリア」を設定することを推奨

- 「アクティビティ」欄に記載した内容がきちんとできているかチェックするための事項を記載する
 - － 行政官が日頃現場のネットワーク等から得る情報やフィードバック等を活用する
 - － 定量的な数値目標が設定できるのであれば明記(KPI(中間目標となる指標)という。)。定量的な把握ができない場合は、定性的な指標を置き、次の見直しの機会の検討材料とすること
- 現時点で記載できないのであれば、記載できるようにアクティビティの内容を変える

特に「アウトカム(初期/短期)」欄のポイントは次のとおり

- 対策改善のため、短期間で確認したいものを設定（⇒その設定したことが達成していないことが早期に分かれば、すぐに対策を改善できる＝「炭鉱のカナリア」。後戻りのための橋ともいえる）
- 目的を持って取り組みれば容易に達成され得る短期の達成目標をこの欄には設定すること。ただし、会議の開催回数など、対策の目的と無関係に（自然に）積み上がるような達成目標は設定しないこと

講じる対策が目指すべきところを「長期アウトカム」欄に明記する

- これに至る道筋を「中期アウトカム」欄に記載する
- 定性的な指標も示すことで、講ずる対策全体の因果のつながりが明確化され、ひいては対策全体が奏功しているか否かが分かる

矢印(→)を使って、対策がどのような因果の流れでつながっていく想定なのか、その思考の流れを明記

- 立案者の目論見を矢印を使って丁寧にたどることで、最終的に目指す成果への唐突なジャンプが避けられ、見直しの際に、設計の意図が分からなくなること
- 講じる対策の意図が明示されることで、多様な社会の視点を取り入れ、有用な意見の聴取にもつながる

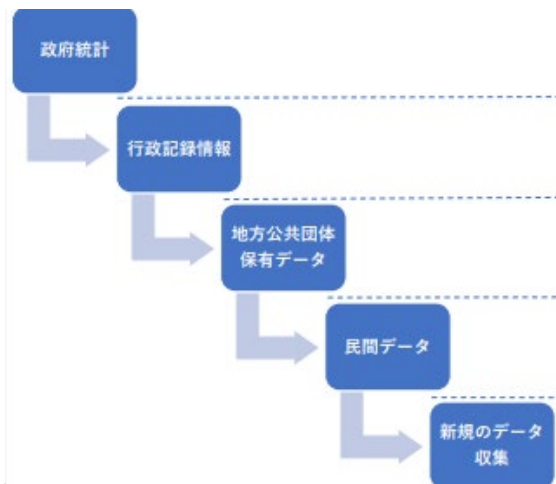
汎用ロジックモデル使用上のポイントと留意点②

● 効果を検証するべく、「効果の把握」をするに当たっての留意事項

対策の効果を、厳密・詳細に把握することはなかなか困難な場合も多いと思われるが、立案者が知りたい情報にできる限り近づくため、次の点に留意して「リサーチデザイン」を行う必要

➤ 知りたい情報の整理

- ・ 類似の対策事例で用いられるロジックモデルや指標の構築・設定の考え方がその際参考になる
- ・ いわゆる炭鉱のカナリア(指標)の達成如何の「確認」か、講じた対策に効果があったか否かの「検証」かで、次に示す知りたい情報の取得手法が異なってくる



➤ 知りたい情報(データ)の収集

- ・ 既存の統計調査等から把握できるかもしれない
 - ・ 標本調査(サンプル調査)を実施してもよいかもしれない
 - ・ 定性的な情報(他機関による事例研究、別途のインタビュー調査)を活用できる可能性
- ※行政官が日頃現場のネットワーク等から得る情報やフィードバック等を活用できる余地

➤ 収集したデータの分析

- ・ 前後比較や、講じた対策の直接の対象者と非対象者の比較、講じた対策の対象者の平均値のみならず、ばらつき(偏差)に着目して分析するなど、様々な分析手法がある

